

「匈奴列傳」(司馬遷)

司馬遷は北方の大遊牧民族匈奴について「詳しく記述した最初の人」だが、それは彼が漢帝國にとつての匈奴の「危険の重大性」を深く認識してゐたからだと言つて可い。『史記』の「匈奴列傳」には司馬遷のさういふ深刻な危機意識が如實に示されてゐるのだが、それについて語る前に、中國と匈奴の攻防の跡を辿つて置かう。

漢に先んじて中國統一を遂げた秦の始皇帝は匈奴討伐に成果を挙げ、匈奴を長城の彼方に追ひ拂はらふが、まもなく始皇帝は死んで秦帝國も崩壊し、中國は動亂の巷ちまたとなつて、項羽と劉邦といふ二人の英雄が覇を競つてゐた頃、匈奴には冒頓ぼくとつぜん單于なる英雄が出現して始皇帝に奪はれた長城以北の失地を回復し、北方に大帝國を建設、やがて長城を越えて南進するに至る。その頃中國では劉邦が項羽を討つて漢帝國を創立してゐたから、冒頓軍を迎へ撃つべく歩兵の大軍を率ゐて北進するが、平城(今の山西省大同附近)で冒頓の精銳騎兵四十萬に包圍され、七日間に互つて寒波と飢餓に苦しんだ末、命か

らから脱出する。これを「平城の恥辱」と云ふ。

その後、匈奴は常に威壓的な態度を示し、漢は數代に互り懷柔策くわいじゆうを採つて、毎年貢物みつぎものを匈奴に贈り、漢の公主（皇族の姫君）を冒頓の息子に嫁がせるなど、「ひたすら姑息こそくな態度で、目前の平和を求め、に汲々とするのみ」（宮崎市定「史記を語る」）で、抜本的な匈奴との對決は第五代武帝の登場を待たねばならぬのだが、それ以前の殊に文帝の時代の、「目前の平和を求めに汲々」たる漢の弱點を鋭く指摘する中行説ちゆうかうせつなる人物が「匈奴列傳」には登場する。武田泰淳によれば、その指摘を漢にとつての「口に苦き良藥、身を焼く淨火として受け取つた」のが司馬遷であつた。そこには漢文化を壓倒する匈奴の「戰鬪文化」の優位性が端的に指摘されてゐたからである。

中行説は文帝に命じられ、冒頓の息子に嫁ぐ漢の公主に隨つて匈奴に赴き、その儘匈奴に降つて重用され、冒頓の謀臣として漢を悩ました人物であり、「匈奴列傳」には、彼が漢の使者に匈奴文化を擁護して語つた言葉が詳しく紹介されてゐる。中行説は云ふ、大平原を疾驅して牧畜を事とする匈奴の生活は剛毅質朴の極みであり、匈奴の男子は子供の頃から騎射に習熟して禽獸を追ひ、事あれば騎兵として戦ひ、侵略と略奪に耽り、若さと健康を尊んで老いと病弱を賤いやしみ、法や禮儀は簡潔で守り易く君臣の關係も簡單だから國としての纏まとりが良いが、それに比べて漢はどうか。禮儀も道德すたも廢れ、法律はややこしく、小賢こざかしき役人ばらが權勢を揮ひ、上下は互に怨み合ひ、住居は贅澤で生活力は衰へ、

農業を衣食の糧とする人民は戦が下手で、城塞工事にこき使はれて疲れ切つてゐる、ああ、漢の汝ら、多辯を弄する勿れ、汝らの衣冠なんぞ何の役に立つものか。

今から三十一年前の一九八九年、アメリカの著名なジャーナリストのジェイムズ・ファローズは軍事を繞る日本社會の「異質性」に仰天して、「アトランティック・マンスリー」にかう書いた、「かくも文民的色彩が濃厚で、軍事的色彩の希薄な社會は他に類例がない」、「軍事問題への日本の取組み方には不眞面目な様子があり、他の全ての事柄については如何にも眞面目であるのと比べると尙更それが目に附く」。今も日本は他に類例無き「軍事的色彩の希薄な社會」だが、大方の國民がそれを異様だなどと思つてゐない。自衛隊は未だに國軍として認知されてゐないのである。だが、「戦闘文化」に相應の敬意を拂はずして、どうして國家が全うに立ち行かれようか。（小川環樹他譯、「史記列傳（四）」、岩波文庫）